

# 近代日蓮主義と生命論

前川 健一

## 1 はじめに

戸田城聖「生命論」は『大白蓮華』創刊号（1949年7月号）に掲載されたものであり、戦後創価学会の思想的方向性を決定づけたものと言ってよい。以後、創価学会教学は生命論を大きな軸の一つとして今日にいたっている。

「生命論」は、生命が三世永遠であり、その生命とは凡夫のありのままのすがたに他ならないと説く。「大聖人は名字即の凡夫位において、本有の生命、常住の仏

を説きいだされている。すなわち凡夫のわれわれのすがた自体が無始本有のすがたである<sup>(1)</sup>。また、宇宙そのものも生命であり、死後の生命は宇宙の生命に溶け込むとしている<sup>(2)</sup>。

このような仏教と生命論との結び付けそのものは、必ずしも戸田の独創ではない。戦前の日蓮主義においても、生命論はさかんに鼓吹されていた。しかし、同じ生命という語を用いても、日蓮主義と戸田との間には看過し得ない差異がある。本稿では、日蓮主義の生命論との比較を通じて戸田生命論の特徴を明らか

にしてみた。

## 2 山川智応

管見の限り、日蓮主義者で最初に生命論を受容したのは山川智応（1879～1956年）である。山川は『日蓮主義と現在将来』（東京・新潮社、1917年）の中で「生命の四大屬性（宇宙は一大生命なり）」の章を立て、次のように論じている。<sup>(3)</sup>「生命の絶待性を究極まで拡充し、そこに円満に全宇宙を純精神的大観に同化し了り、全宇宙の絶待的生命を以て自己の全生命とし、自己即宇宙、宇宙即自己の境地を体験し一念三千を実現したる大人格、その経験を以て一切人類の生命を開顕したる大人格が仏陀である。仏陀は究極点において全宇宙の真生命と同一視せられる。（中略）法華経の如来寿命品は、この宇宙生命の絶待的自体としての一大本仏を説き顕はされた」（174～5頁）。また、この宇宙生命＝本仏という立場から、三大秘法について次のように説いている。

本門本尊＝宇宙生命の精神的（象徴的）表現

本門題目＝宇宙生命の個的表現

本門戒壇＝宇宙生命の社会的表現

山川は「絶待性」を「霊的拡大」（165頁）とも表現しているが、要するに、全てを包摂・同化する宇宙生命を本質とするものが本仏だということになる。一方、「衆生の生命はまた宇宙生命の応現である」（175頁）。個人の個的生命は、本仏を信ずることで、「釈尊の仏子となり、（中略）釈尊と一となり、釈尊と一なる妙法と一となる」（175～6頁）。山川は「即身成仏とは個的生命即絶待的生命なりといふ意だ」（178頁）と述べているが、衆生の側から言えば、宇宙生命たる本仏への一体化ということになる。

山川は「其が詳細は他日大に世に問はむと欲する所のものたり」（「例言」、目次1頁）と述べているが、何故か山川自身はこの後「詳細」を発表してはいないように見える。しかし、日蓮主義的生命論の骨格は山川の議論に尽きているとも言え、その先駆的役割は大きい<sup>(4)</sup>と思われる。

### 3 里見岸雄

山川が素描を示した日蓮主義的生命論を受け継いだのが、里見岸雄（1897～1974年）である。もつとも、里見は山川に言及しないので、両者の議論に直接つながりがあるかは検討の余地があるが、基本的な論点が共通していることは事実である。

しかし、彼の場合、「生命」概念に若干の変遷があるように見える。<sup>(5)</sup>『法華経の研究』（東京・平楽寺書店、1924年）で里見は次のように述べている。「仏とは何であるか、それは生命現象の最も純粹なるもの、最高の理想をあらはせるものではないか。一切の個的生命が、その生命完成の標準とする典型的人格の儀表者に外ならない。（中略）本仏とは何か、それは実に一切の個的生命に普遍しつゝ、然もその根源を為す生命の絶対的本質である。換言すれば全体としての宇宙生命の人格的呼称に外ならぬ」（356頁）。この段階の里見に特徴的なのは、引用にもあるように本仏の人格性を強調する点であり、「人類の悉くが、釈迦牟尼仏を人格完成の絶

対境とし最高標準として、是に同化せらるべき」（567頁）と述べている。また、このような信仰生活を「生命完成運動」（574頁）とも称している。「生命人格」（566頁）という語も使われるように、ここでの「生命」は人格と同一視される個的生命を意味していると考えられる。

ところが、『吼える日蓮』（東京・春秋社、1931年。『日蓮は甦る』（京都・国体科学社、1929年）の改題版）では、次のように述べる。「本仏とは生命体系なりと看破してこそ、それが草にならうと、木にならうと、すこしも不思議がなくなるのである」（120頁）「本仏とは元來、生命の表現語であつて、その生命は総じて無始無終の實在であるが、その発現の最低の段階は、植物、動物等であり、その一層高度の段階は人類である」（127頁）「本仏といふ事は、これを機械的自然觀に約せば一切の生命体系であり、これを法則的理念に約せば生命現象の法則の表現としての妙法蓮華経であり、これを目的的人格觀に約せば吾等の意識的把握とそれの化他的実践であり、而してこれを道德的宗教觀に約す

る時は、釈迦牟尼仏であり、又日蓮であるといふ事になる」(129頁)。つまり、個的生命よりも、その背後にある「生命体系」に重心が移っていることが看取されよう。このような変化が何故起こったのか、研究の余地があるが、<sup>(6)</sup>ともあれ、里見の生命論が結果として山川のそれと同じような地点に落ち着いたことは認められよう。

里見の生命論の影響は様々な点に見ることができるといえば、里見の実父である田中智学も次のように述べている。「久遠実成の法門が明かされ、常住の大生命があらわれた。これを、本仏という。すなわち仏の眞の本体があらわれたのである。(中略)すなわち絶対の实在であり、宇宙の大生命なのである」(1932年の講演「本化の信」。田中智学「日蓮主義の信仰」、東京・真世界社、1965年、83頁)。また、満洲事変の首謀者である石原莞爾が、里見岸雄の影響を受けて、宇宙生命論を支持していたことも指摘されている(松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開』、東京・東京大学出版会、2005年、124頁、135頁、135頁)。

しかも、こうした生命論的言説の影響は、国柱会系の日蓮主義者にとどまるものではない。一例として、堀米泰栄(日淳)の場合を挙げておこう。堀米は、1922年の論文「信じ得ぬ人々へ」で、次のように書いている。「久遠の生命を直観したる者にして初めて分段変易の生死を超越するを得、如々の本仏の世界を直達正観したる者が初めて人間苦を脱し得るのである」(『日淳上人全集』巻下、東京・日蓮正宗仏書刊行会、1960年、691頁)。「人間本来生命そのものであると開悟したる時は豈に生きんと努力する必要はないはずである」(同上692頁)。「芸術、科学、倫理の背後に横たはる生命こそ宗教の本体である」(同上694頁)。直接的な表現ではないが、ここで述べられている「生命」は本仏や眞如といった仏教的概念に極めて近いように思われる。<sup>(7)</sup>

#### 4 小林一郎

ここでは、戸田と直接関わりのある人物として小林一郎(1876年～1944年)を検討しておきたい(もちろん、堀米も深い関わりがあるが)。小林は、哲学者・文

学研究者であり、東京帝国大学講師・日蓮宗大学林（立正大学 教授・中央大学教授などを歴任した。また、彼は在家団体「法華会」の中心人物であり、在家の日蓮信仰者であった。「法華会」は、田中智学の国柱会などのような国粹主義的傾向とは一線を画し、知識人を中心とした穏健な日蓮信仰を推進する団体である。彼の『法華経大講座』（1935年～1936年）は平凡社から出版されたが、同社の社運を賭けた事業と言われ、大成功を収めた。<sup>(8)</sup>彼の法華経講義は、もともと口述筆記をもとにしていることもあって、とにかく平易である。教理的な概念も出てくるが、かなり噛み砕いた説明がなされており、この点は今日でも高く評価されている。仏教以外の話題もしばしば参照され、全体としては教養主義的色彩が強いと言えよう。戸田との比較のため、「寿命品」の「我此土安穩 天人常充滿」云々の箇所<sup>(9)</sup>の講義を一例として引用しておこう。

『我が此の土』といふのは、自分が居るこの土地といふことではない。仏の眼から見た世の中、仏のお心で考へていらつしやる世の中、それが『我が

此の土』であります。（中略）仏様のお考へに依れば、人間の心が皆浄らかになつてしまへば、世の中が海まきとに平穩になつて、その周囲の境界がドンナ二變つても、如何なる事情の下にあつても、そんなものに動かされたり、心に煩ひを受けるやうなものではないといふのであります。（中略）これは心の浄くなつた者の世界を言ふのです（巻7・247頁～8頁）。

後述する戸田の思想との関連で興味深いのは、小林が「天地万有を支配するところの」『理』を「生命（いのち）」<sup>(10)</sup>ととらえていることである。そして、次のように述べている。

その大きな生命を吾々は仏様といふ言葉で言ひ現しますが、決してその仏様を吾々と懸離れたものと思ふのではない。無論限りある吾々の毎日の生活よりはモツと以上のものであるけれども、しかしその以上のものであるといふことは、吾々から離れたといふことではない。吾々が皆其の大きな力に包まれ、其の大きな力に衛られて存在して居

ると思ふのです（巻7・83頁～84頁）。

さらに、小林は、この「大きな生命」を本仏とも呼んでいる。小林の場合も、「吾々」はあくまで「大きな生命」である本仏に包容される存在であり、「吾々」自身が「生命」であるという点は強調されていない。ここに戸田の独自性を見ることができると。

## 5 戸田城聖の法華経講義

戸田の法華経講義は、出獄後、1946年1月から開始され、1951年5月3日に戸田が創価学会会長に就任してからは、教学部一級講義として方便品・寿量品の講義が行われた。講義は公開で行われ、会場の外にまで聴衆があふれたと言う。講義の記録は、創価学会の機関誌『大白蓮華』60～65号、同68～73号に掲載され、それをもとに『方便品寿量品精解』として1958年に出版されている。

戸田は中央大学を卒業しているが、在学中に小林から倫理学や哲学を学んでおり、小林の法華経講義も読んでいることが知られる。<sup>9)</sup>しかし、戸田は小林の講義

について「これはどうしても儒教の学説なのです。仏というものが成り立っていないのです」と批判している。「儒教の学説」というのは、小林の教養主義的解釈への批判と解することができるが、戸田自身が述べているように、「仏」をどのように見るかという点に両者の最大の相違がある。しかし、その問題に入る前に、まず一般的に戸田の講義の特徴を見ておきたい。

単行本では省略されているが、『大白蓮華』の連載では、随所に「笑」が見られる。このユーモアのセンスが、戸田の法華経講義の一つの特徴である。それは単に面白おかしく言うのではなく、庶民の生活に肉薄する時、おのずとユーモアがこぼれ出るのである。対照のため、先の小林の講義と同じ箇所への講義を引用しておく。

我此土安穩、御本尊様のあるあなた方の家は我此土安穩なんです。安穩でなきやならないのです。大火所焼時じやないのです。そうして天人常充滿、天界のような人、静かな人間、その人たちが絶えず充滿してなきやならない。ところが反対だとい

うと大変ですよ。カカアはフクれてるし、オヤジは怒つてるし、子供は泣いてる。たまに人が入つてくると借金取りばかりだ。さつぱり天人常充滿じゃないでしょ(『大白蓮華』65号、16頁〜17頁。『全集』

第5巻(1985年・2月)420頁)。

先に引用した小林の講義が、仏の目から見た清浄な世界として「我此土安穩」を解釈するのに対して、戸田の解釈では、この経文は我々衆生(凡夫)の生活そのものなのである。

戸田の講義の特色は、「文底読み」と称する独自の読み方であるとされる。それは、法華経を日蓮の行動や思想そのものの表現として読み直すことである。日蓮宗系の法華経注釈書では、法華経を日蓮の意図に添って解釈することが行われるが、それはあくまで『法華文句』などの解釈を踏まえて、新たな解釈を加えていくものである。戸田が依拠している日蓮正宗の教学体系でも、その点は大きくは変わらない。しかし、戸田が行っているのは、そうした解釈とある意味ではレベルを異にしている。法華経それ自体を直接的に日蓮の思

想の表現と解するだけでなく、さらには先の引用にも見えるように、信仰者自身の生活の表現として解釈していくのである。ここには、戸田の獄中での悟達が深く影響している。

戸田は自らの体験について、小説『人間革命』の中で次のように記している。<sup>(11)</sup>

「仏とは生命なんだ！」

巖さん(戸田をモデルとする作中人物)が机の前で叫んだ時、凍った海底のように、寒さを湛えてシン！となっていた部屋に、強く両手を打合わせた音がばあん！と響いた。

「仏とは、生命の表現なんだ！外にあるものではなく、自分の命にあるものだ！いや、外にもある！それは宇宙生命の一実体なんだ！」(戸田『小説 人間革命』下巻、1972年、東京・聖教新聞社(聖教文庫)、238頁)

戸田が獄中で悟った生命論の立場では、仏とは個々の人間に内在する生命に他ならない。<sup>(12)</sup>これは、小林一郎をはじめとする日蓮主義者の生命論とは、似ている

ようである、大きく異なる。日蓮主義者たちにおいては、仏は衆生を包摂する宇宙生命と見なされていた。それに対して、戸田の場合、仏は個々人の生命そのものであり、それが外在的に表現されたものが宇宙生命なのである。そのため、本仏である日蓮を表現する法華経は、同時に吾々個々のことを説いた經典に他ならないと解されるのである。これは、日蓮自身の言説<sup>(13)</sup>や、『御義口伝<sup>(14)</sup>』などにも散見される思想ではあるが、その点を、生命論を媒介にして明確化したところに戸田の法華経講義の最大の特徴がある。これは、仏に救ってもらおう衆生という受け身の姿勢から転換して、衆生自身を仏として位置づけることを意味しており、民衆の主体性を強調することになる。この点に、戸田の講義が、多くの庶民にアピールした秘密があり、法華経解釈史の上で独自の地位を占めるものがあると言えよう。

### むすび

日蓮主義者たちと戸田城聖は「仏<sup>(15)</sup>生命」論という共通性を有しているもかわらず、その相違はかなり

大きなものがあつた。その淵源は、「仏<sup>(15)</sup>生命」という場合の、重点の置き方にあつたと言える。戦前の日蓮主義者が、「仏<sup>(15)</sup>生命」という場合、その「生命」とは本仏としての宇宙生命であり、「生命」が個々人に内在することには必ずしも力点が置かれていなかった。それに対して、戸田の場合、「生命」とは何よりも個々人の生命であり、個々人が「仏」であることに力点が置かれていた。

社会思想の観点から言えば、日蓮主義者らの「本仏<sup>(15)</sup>生命」論は、包括的な宇宙生命を中心とする点で、全体主義的な社会観に親和性が高く、事実、彼らの多くが熱烈な国家主義者であつた。それに対して、個々人の生命に力点を置く戸田の生命論は、主権在民を掲げる戦後体制に即応するものであつたと言える。戦前の日蓮主義者に「宗教的信念から人間の生存を第一に尊重するという思想性<sup>(16)</sup>」が見出せないのに対して、戸田が「われわれ世界の民衆は、生存の権利をもつております<sup>(17)</sup>」と宣言したのは、両者の生命論の構図そのものに起因すると言えるのではないだろうか。

(本稿は中国社会科学院世界宗教研究所での発表「近代日本における法華経解釈」に加筆したものである)。

注

- (1) 『戸田城聖全集(以下、全集)』第3巻(東京・聖教新聞社、1983年) 14頁。
- (2) なお、いわゆる「獄中の悟達」については、「私はひじょうに不思議なことにつきあたり、いまだかつて、はかり知りえなかつた境地が眼前に展開した」(全集3巻7頁)とやうに止められている。
- (3) ちなみに四大属性とは、持統性・拡大性・自主性・待性。この四大属性は、生存慾・生殖慾・自由慾・同化慾に対応するとされる。
- (4) 山川著『我等の眞の永生』(東京・天業民報社・1923年)にも同様の生命論が展開されるが、短篇であり、「詳細」とは言いがたい。そもそも山川が何故生命論に関心を持ったのかも、今のところ未詳である。
- (5) 里見が、最初に生命論を説いたのは『日蓮上人聖典の新解釈』(東京・天業民報社、1920年)であるようだが、筆者未見。最初の著作(早稲田大学の卒業論文)である『日蓮主義の新研究』(東京・国柱産業書籍部、1919年)には生命論的解釈は見当たらない。
- (6) 一つには留学経験の影響が考えられる。
- (7) 堀米も里見と同じく早稲田大学に学んでいるが、影響関係があるかは未詳。
- (8) 小林の生涯・業績については、『法華経大講座(新版)』巻十二(東京・日新出版、1965年)所収「小林一郎先生の思い出」参照。なお、以下、『法華経大講座』からの引用は、平凡社刊の初版本による。
- (9) 「私は中大で、小林先生に倫理学や哲学を習ったものですから、先生の講義録を非難するというのは、弟子が師匠を非難するのはいけません。だが私は、講義録はぜひぶん読みしましたが、これはどうしてもだめです」(戸田『質問会集』、東京創価学会、1963年、172頁。『全集』第2巻(1982年)200頁)
- (10) 戸田前掲172頁
- (11) この「悟達」は、『無量義経』の中の「其身(＝仏身)非有亦非無 非因非縁非自他」云々という偈に基づいて生じたものである。小林をはじめとする日蓮主義者たちは、『法華経』「寿命品」の本仏論を中心として生命論を展開しており、戸田の生命論が彼らとは独立に構想されたことを物語るものと言える。
- (12) 以下のような発言は、戸田が生命という言葉を使う場合の力点の所在をよく示すものである。「一人ひとり生命のなかには、御本尊がおられる。(中略)信じても信じなくても、御本尊ははいっている」「いっさいを動かすものが「南無妙法蓮華経」の当体にあると、日蓮大聖人様はお説きなされた。その動かす力が、わ

れわれの生命にある。それを開くのである」(1953年の講演「未来の幸福のために」、『全集』第4巻、1984年、70頁)

(13) たとえば、「妙覚の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや」(『観心本尊抄』、日蓮大聖人御書全集246頁)、「八万四千の法蔵は我身一身の日記文書なり」(『三世諸仏総勘文教相廃立』、御書全集563頁)たとえば、「今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり」(御書全集752頁)

(15) 小林一郎は、田中ら国柱会とは一線を画していたが、『皇国精神講座』(1941年～1943年)といった著作もある。

(16) 松岡前掲書313頁。

(17) 1957年の講演「原水爆使用者は死刑に」(原水爆禁止宣言)、『全集』第4巻、566頁。

(まえがわ けんいち／東洋哲学研究所研究員)